

益谷秀次

人生の大先輩であり、政治の師でもある益谷秀次先生の靈に、謹んでお別れの言葉を申し上げ
ます。

八月十八日未明、私は先生の突然の訃報に接しました。いま、深い悲しみの底にあつて私は、
明治、大正、昭和の三代、八十五年におよぶ先生の波瀾と栄光に満ちた生涯を感無量の思いをも
つて偲んでおります。

人は、先生の一生をもつて、功成り名を遂げ、天寿を全うしたものと云うかも知れません。確
かに先生は、あくまでも己の欲するところを生き、その念願とするところを達成されました。出
ては五十余年の政治生活を貫かれ、日本の政党政治のあらゆる枢機に参画され、磨きぬかれた
判断力をもつて円熟した指導力を発揮されました。入りては、まつい夫人をはじめ、良きご家族
と良き友人に恵まれ、日夜酒盃を友としながら、充実した人生を生きられました。しかし、いつ

までも先生の暖いご指導を願えるものと思つていたご遺族とわれわれ後輩にとっては、先生のご逝去は耐えられない悲しみであります。

困難な事態に直面したとき、われわれに自信をあたえるべく、常に見せていただいた慈父の如き温顔はもはやないのであります。

先生を、人生や政治の師と仰いでいた私達の悲嘆と痛恨の念は鉛のごとく重く、かけがえのない人を奪い去つた天意の無情さを慨嘆するばかりであります。

先生は寡黙にして誠実、無欲で恬澹たる中に、厚い情味のある人でありました。能登半島一、二といわれる旧家である益谷家の二男として生まれ、伸び伸びと生きてこられた先生の人生は、幼時から学生生活、大正九年、三十二歳で衆議院議員に初当選されてから半世紀を越す政治生活、そのいつの時代にも、人の心を温め慰めてくれる珠玉のような逸話に満ちたものであります。

数次にわたつて自民党の総務会長を務め、三年の永きにわたり、名衆議院議長として難しい時代の国政を取りまとめてこられたのも、先生の類い稀れな人柄に負うところだったのであります。また先生は、一度門を叩き私淑するものをよく見守り、自分のことを措いても、よく面倒を見てこられたのであります。先生よりも遙か後輩にあたる池田勇人、佐藤栄作の二人を育て、二代に

わたり總理たらしめたのも、先生のお引立てがあればこそでありました。

昭和二十七年、私が一年生議員として当選して出てきたとき、先生はすでに建設大臣、自民党総務会長などの重責を務め、林譲治、大野伴睦両氏とともに「三家」と称されて、政界にゆるぎない地歩を確立しておられました。その私も、やがて池田元總理に次いで、先生に指導され、先生に私淑し、折にふれて東京矢来の家の門を叩き、味わい深い先生のお話を伺うのを何よりも楽しみにする一人となりました。

昭和三十五年、池田内閣が成立するや、未熟な私が官房長官の大役を務めることができたのも、万事老練にして、ゆきとどいた先生が党の幹事長としてご指導下さいました賜物でありました。

先生はまた、優れて篤く郷土を思う人でありました。能登半島に縦貫鉄道を敷くのは、先生の金沢二中時代からの宿願でありました。大正九年、政界に打って出る動機の一半も、能登へ汽車を「の夢を実現することにあつたといわれます。かつて陸の孤島のごとく見られていた能登が今日、観光ブームに見舞われ、地元の発展と、知られざる日本の発見と紹介に尽された功績の大部分は、益谷先生の四十余年をかけた政治活動に負うべきものであります。

いま、わが国は内外ともに困難な事態に直面し、わが党もまた、その鼎の輕重を問われようと

しております。しかし先生の遺志は、先生が手塩にかけられた、若き瓦力君によって受け継がれ、また、石川県からは安田隆明、嶋崎均、別川悠紀夫君らの同志が、先生の残された足跡を引き継いでいこうとしております。私もまた、これらの同志諸君とともに手をたずさえ、わが国のため、わが党のため、全力を傾ける決意であります。

残暑いまなお厳しく、先生のこよなく愛した能登の宇出津^{うしづ}は、昼下がりの炎熱の中に静まりかえっております。先生との永別の時を迎えるにあたり、人々はただ黙して、ありし日の先生のご遺徳を偲び、声もなく痛哭するばかりであります。

先生、どうか、心安らかに眠り下さい。

私達は、微力ながら誓って先生の残されたご足跡を守る覚悟であります。

先生からの生前賜わった数々のご厚情を偲んで心からお礼を申し上げ、お別れの言葉といたします。